

GAKKAN GAKUFU 38



情報学環・Daiwa

ユビキタス学術研究館(仮称)

建設開始

～ 2012年10月着工 ～



新建物の建築場所は、本郷キャンパス春日門を入ってすぐ、3階建てのプレハブ校舎が2棟並んでいた、懐徳館の庭園に面した敷地部分である。現在、この2棟のプレハブ校舎を取り壊して建設が進められている。情報学環の創設時をご存知の方であればご記憶のことと思うが、ここは、情報学環が創設されたときに最初に設置された場所であり、その後、総合分析情報学コースの教員研究室等として利用されていたところである。

施工は寄付者である大和ハウス工業株式会社が実施し、建物の設計・デザインについては、工学系研究科建築学専攻の隈研吾教授、建物内のユビキタスコンピューティング技術を活用したスマートビル設備、及び建物などの空間物の展示については、情報学環の坂村健教授が担当して進められている。

今回の新建物は地上3階、地下2階の合計5フロアから構成されており、100人規模のホールや、空間物(※注)の展示スペース、店舗、総合分析情報学コース担当の教員室・研究室・実験室、ユビキタス情報社会基盤研究センターなどが設置される予定である。これまで情報学環の中で、総合分析情報学コース担当の研究室はプレハブの暫定校舎に残され、研究教育上非常に大きく制約されていたが、今回の建物によって、通常の校舎に研究室を設置することが可能となり、かねてからの念願がやっと叶うといったところである。

2010年5月に大和ハウス工業株式会社から東京大学に対して建物寄付のお申し出をいただき、その後準備を進め、2011年の夏から、当該地域の研究室等を移転、敷地部分のプレハブ校舎の取り壊し、そして、埋蔵文化財に関する発掘調査を実施し、2012年10月より建設が開始された。

2012年10月3日朝、根津神社において、本学からは濱田純一総長、須藤修情報学環長、坂村健副学環長、隈研吾教授、事務部の方々が出席し、大和ハウス工業株式会社からは、樋口武男会長をはじめとして、現場工事関係の方々も含めた皆様のご列席のもと、工事の安全祈願祭が執り行われた。

その後、場所を大和ハウス工業株式会社東京本社内に移し、建物寄付に関する記者発表が行われ、新聞、雑誌、専門誌などから、約50名の方々にお集まりいただいた。始めに、大和ハウス工業の樋口会長から、今回

現在、情報学環では、大和ハウス工業株式会社からの寄付により、「情報学環・Daiwa ユビキタス学術研究館(仮称)」を建設中である。大和ハウス工業株式会社は、住宅の建設を主たる事業としており、近年ではスマートハウスといった、情報技術を活用した建築にも取り組んでいる。こうしたことから、情報学環で実施されているユビキタスコンピューティングの研究教育活動に関心を持たれ、その支援をお申し出くださったことが、今回の建物寄付の経緯である。この場を借りて、大和ハウス工業株式会社によるご支援に、深く感謝したい。

の建物寄付の経緯や趣旨に関するお話があり、続いて須藤学環長より、濱田総長のメッセージのご紹介と情報学環としてのお礼の言葉が述べられた。さらに、隈教授からは今回の建物の設計デザインに関するコンセプトが語られ、坂村教授からは、スマートビルの設備と空間物展示スペースに関する説明がなされた。この発表内容は、新聞各紙やインターネットなどで数多く報道され、この建物に対して、関係各所の注目度が高いことが示された。

これより一年あまりの間、建設工事が進められ、竣工は2014年2月、そして2014年度初頭より利用が開始される予定である。その間、完成にむけ関係の皆様には、是非ともご協力・ご支援をお願いできれば幸いである。春日門は、本郷三丁目の駅に非常に近い門ではあるが、これまでは目立った建物がなく、地味なエリアであった。本建物が完成した暁には、懐徳館庭園の豊かな緑と調和した、本郷キャンパスの新しいシンボルとなることを願っている。(教授・越塚登)



2012年10月3日 安全祈願祭にて

(※)「空間物」とは、人間を囲いこむ「空間」型の「物」であり、代表的なものには、建物などがある。普通に考えると、限られたところで展示することは、なかなか難しいものであるが、本建物では空間物を展示するスペースが設置されており、コンピュータを最大限に利用した展示を行う予定である。



2012年10月3日 記者発表にて
左から坂村健副学環長、樋口武男会長、須藤修学環長、隈研吾教授

Topics & News

Interfaculty Initiative in Information Studies and Graduate School of Interdisciplinary Information Studies, The University of Tokyo

公開フォーラム

「震災の記録をどう活用するか

—膨大な映像記録を中心に—



11月24日、福武ラーニングシアターにて、公開フォーラム「震災の記録をどう活用するか—膨大な映像記録を中心に—」が情報学環の主催で行われた。田中淳総合防災情報研究センター長の主催者挨拶、大滝則忠国立国会図書館長、高山正也国立公文書館館長の来賓挨拶の後、御厨貴東京大学客員教授の基調講演では、震災から1年8ヶ月が経過し、われわれの記憶の整理が進み、震災アーカイブが第2ラウンドに移行していることが指摘された。続いて、東日本大震災のアーカイブに取り組む放送局、新聞社、大学、ネット企業、NPO、自治体から、現状とその問題点が具体的に報告され、この報告をふまえて、吉見俊哉教授の司会のもと、報告者に加え、御厨貴氏、高野明彦氏（国立情報学研究所）、玉井克哉氏（東京大学先端科学技術研究センター）、目黒公郎氏（情報学環）、柳与志夫氏（国立国会図書館電子情報部）を交えて、アーカイブにおける表現の自由と著作権、使用許諾、コンプライアンスなどの課題の整理と解決の方向性について討論が行われた。東日本大震災で記録された膨大な映像記録をふまえ、今後起こる可能性が指摘されている南海、東南海、東海、首都直下などの大地震にどのように対応するのかという、極めて公共性が高く、緊急性のある取り組みであることを世間にアピールし、世論形成していく必要があることが共有された。（独立行政法人防災科学技術研究所客員研究員・三浦伸也）

アジア情報社会コース (ITASIA) 第一回学生発表会開催

11月23日、福武ホールにてITASIA学生会 (SBG) 企画による学会が開催され、学環の院生8名を含む内外の12名による研究発表が行われた。発表は、国際政治、社会運動、メディアの3つのテーマに分かれ、各テーマのパネルには他大学からの学者を含めた討論者も招かれた。海外の大学院では、年に一度、院生がこのような学会を主催することは珍しくなく、堅苦しさのない雰囲気の中、自分の研究を発表し、アドバイスを得る絶好の機会となる。また、発表者としてのメリットに留まらず、学会を学生自らが企画することにより、学会の企画運営やパネルの構成の仕方を学び、学生同士や学者との交流を持つ良い機会にもなる。今後もこのような学会を恒例イベントとして開催することにより、英語を介したグローバルな研究発表の場を提供していけるのではないだろうか。（准教授・ジェイソン・G・カーリン）

OpenFlowを超える “深遠なプログラム性”を持つ ネットワーク機器を開発

ネットワーク最先端技術のSDN (Software Defined Network) に対し、更にプログラム性を追求したDPN (Deeply Programmable Network) を実現する「FLARE」という独自ネットワーク機器を中尾彰宏准教授が開発した。Linuxプログラムにより柔軟かつ動的に機能を構成することが可能でありながら、10Gbpsの帯域も実現する画期的な機器である。日経BP主催ITPro等のイベントで、イーサネット、OpenFlow、拡張MAC独自プロトコル等の複数同時動作を実証し、Stanford大学に招待されて講演するなど国内外で大きな反響を得た。（准教授・中尾彰宏）

留学生バス旅行2012

学際情報学府では近年、留学生向けにイベントを企画しており、今年度は11月10日、鎌倉市と江ノ島へ日帰りバスツアーを実施し、研究生、修士、博士合わせて33名が参加した。鎌倉市では各グループに1人の英語ガイドが付き、鶴岡八幡宮などの有名な寺社を見学。各自が熱心に説明に聞き入った。

江ノ島では、美しい晴天のもと、輝く海と富士山を一望することができた。秋のさわやかな気候の中、留学生同士が互いに打ち解けたようで、個人で参加した学生もグループに交わり、笑顔で写真を撮り合う微笑ましい姿がたくさん見られた。

ご協力いただいた関係者並びにスタッフの皆様へ深く感謝するとともに、留学生同士が親睦を深める良い機会になったことを願っている。（留学生支援室）



日韓共同シンポジウム開催



写真撮影：Susan Taylor

11月9日～10日、韓国のソウル大学にて「東京大学ソウル大学日韓共同シンポジウム」（略称：日韓シンポジウム）が開催された。当シンポジウムは、ソウル大学校社会科学大学言論情報学科と東京大学の情報学環・学際情報学府との共催で毎年開かれている。今回のテーマは「Social Media and Public Communication」だった。

シンポジウムはFaculty SessionとStudent Sessionに分かれ、Faculty Sessionは林香里先生（東大）とYoun Sugmin先生（ソウル大）の祝辞、そして水越伸先生、岡本剛和先生、金ヨニ先生（東大）とLee Eun-ju先生、Lee Joon Hwan先生（ソウル大）との熱い討論が繰り広げられた。Student Sessionは2つの場所で分かれて開かれ、東大側の学生12名（Fellow visitor 1名）、ソウル大側の学生8名が研究成果を発表した。各SessionのChairの方はもちろん、参加者の議論も白熱した。シンポジウム終了後も自発的に参加者同士の交流があり、学術、生活、学校の雰囲気などについての情報交換も夜まで続いた。最終日には、東大側の参加者全員がソウル大学の用意したソウル市内ツアーに参加し、韓国の伝統と現在を体験することができた。緊張感の続いた2日間だったが、参加者が自ら積極的に発信し、Social Media and Public Communicationについて真剣に、そして熱く語り合った「熱い」シンポジウムだった。（須藤研D1・林相薫）

人事異動

配置換（転出）

- 10/1 石田英敬 教授
総合文化研究科へ
- 11/1 篠崎智大 助教
医学系研究科へ

配置換（転入）

- 11/1 朝倉敬子 助教
医学系研究科より

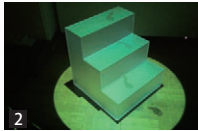
「第14回東京大学制作展」開催

12月6日から10日までの5日間、「第14回東京大学制作展」を開催しました。学際情報学府を中心に、情報理工学系研究科や工学系研究科の学生総勢30名の力を合わせ、工学部2号館2階展示室、フォーラム、9階92B教室、情報学環・福武ホールを会場に約25作品を展示。会期中は約500名以上の方々にご来場いただきました。

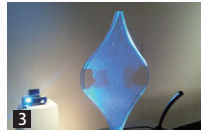
制作展は学際情報学府の授業でありながらも、学生が主体となって行っているメディア・アートの展示会です。今回は展示会テーマを「いとをかし」とし、趣深い作品と展示空間づくりを心がけました。本年夏に開催した「東京大学制作展エクストラ 2012」で学んだことを活かし、情報技術になじみのない方にも楽しんでいただけるよう、7日には制作展の全会場を回る「ギャラリー・ツアー」を実施。この他にも出品作を用いたライブ演奏、観客を取り込むパフォーマンス、福武ホールの壁に映像を投影し観客を工学部2号館へと誘う「制作展プロジェクションパナー」など多くの新しい試みを行いました。(西野研 M1・慶野結香)



1: 「4g メカ コメツキムシ」 福嶋昭彦



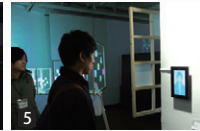
2: 「Nude Descending a Staircase」 Justin and Natasha



3: 「Sound ROKA」 佐川俊介

4: 「機械にはこう見えている」天野宗佑

5: 「心映し」吉田成朗



情報学環ホームカミングデイ

10月20日の東京大学ホームカミングデイの一環として、情報学環では福武ホールラーニングシアターにて、情報科学・インタラクション・メディアコンテンツ制作をテーマとした講演会を実施した。学環長によるオープニングメッセージの後、工学系研究科の荒川先生、学環卒業生でもある、慶應義塾大学の寛康明先生、情報学環から五十嵐健夫先生と暦本の四名による講演が行われ、会場からも大変活発な質疑応答があった。講演後には、教育部交流会との合同での懇談会が開催され、在学生、卒業生、教員、学環関係者の交流が深められた。(企画広報委員長・暦本純一)



「放送人の証言」の内側から描き出す「日本テレビ史」

12月1日、福武ラーニングスタジオにて、情報学環メディア・コンテンツ総合

研究機構の活動の一環として、研究会「テレビ研究における〈口述資料〉〈証言〉の可能性—草創期〈放送人〉の相関関係を抽出する試みを例として」(学環×マスコミ学会)が開催された。本研究会では、170人余りの「放送人の証言」の視聴覚アーカイブをもとに、テレビドラマやドキュメンタリーの制作者、カメラマン、音響効果マンたちの系譜を考古学的に辿りつつ、その歴史的布置をデジタル技術によって分析し可視化する試みが紹介された。テレビ放送60年を迎えるにあたり、「放送人の証言」から内在的に日本テレビ史を記述する方法が提示され、活発な議論が展開された。(特任研究員・中路武士)

受賞報告

■西垣研出身の西田洋平が、在学中に投稿した論文「情報学の哲学的前提と生命観—メタ理論としての情報学と生命論の表裏一体性」により、7月7日、情報メディア学会論文賞を受賞した。

■東京都現代美術館で9月9日に開催された「MOTブルーム パーグ・パヴィリオン・プロジェクト[公募展]メディア・パフォーマ



ンス部門」で武井祥平(苗村研・学術支援専門職員)の作品「MorPhys」がグランプリを受賞し、9月25日~10月8日に受賞展が開催された。

■西垣研出身の大井奈美(特任助教)が、9月15日、「ネオ・サイバネティクスの近現代俳句研究—文学研究にたいする基礎情報学の批判的応用」により、社会情報学会 大学院学位論文賞(博士論文)を受賞した。

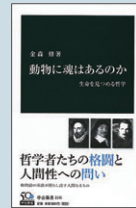
■日本の優れたコンテンツ技術を開掘・評価する経済産業省の事業 Innovative Technologies に、苗村研の橋田朋子(特任研究員)と西村光平(M1)が研究開発したシステム「Handrewriting」が採択され、10月25日、日本科学未来館で開催されたデジタルコンテンツEXPO内で表彰された。さらに11月13日ボストンで開催された国際学会 ACM Interactive Tabletops and Surfaces 2012 にて Best Paper Nominee を受賞した。

■水鳥希(特任助教)が、「原子力災害後の女性運動と科学技術:放射性物質をめぐる女性たちの経験・実践の記録と分析」により、11月17日、科学技術社会論ではほぼ唯一の賞、柿内賢信奨励賞を受賞した。

Books

『動物に魂はあるのか』

金森修 著 / 中央公論新社 2012年8月



動物はいかなる感覚ももたない機械にすぎない。デカルトの、この激烈な議論に対抗して組まれたのが17世紀から18世紀にかけて盛んにいわれた動物霊魂論だ。本書はヨーロッパでの動物観の思想史であり、人間と動物との裂け目をどう捉えるかを巡る、間接的な人間論でもある。

『生命のサンドウィッチ理論』

池上高志 著 / 講談社 2012年10月



生命現象は、原子や分子のハードウェアとしての性質と、その上の心や意識というソフトウェアとしての性質で語られる。しかしこの2つの層の真ん中に、あまり語られない、自分で動く三番目の層があり、それが2つの層を切りつつ結んでいる。それが「生命のサンドウィッチ理論」で、本書はそこから生命の秘密を探る。

『Idols and Celebrity in Japanese Media Culture』

Patrick W. Galbraith and Jason G. Karlin 編 / Palgrave Macmillan 2012年10月



日本のアイドルとタレントにまつわる現象の分析を通して日本のメディアシステムを解明する試みとして、2010年にカーリン准教授が担当した授業を履修した学際情報学府の学生3名を含む10名の研究者が、歴史と現代、生産と消費、産業構造とファン行動など様々な視点からの研究を提供した論集。

Interview

時空の壁を乗り越える猛者

松田康博教授



ご専門は東アジアの政治と国際関係。歴史研究で得た知見を現状分析に活かし、現状分析で培ったノウハウを歴史研究に活用する。その手法は、時を越え、海峡を越え、縦横無尽に広がっています。止むことのないエネルギーに触れ、元気を分けていただいたインタビューでした。

語学マニアとお聞きしましたが、外国語との出会いはどのようなものだったのでしょうか

もともと外国への憧れがあり、小学5年生のころからNHKのラジオ講座を聞いていました。高校時代には、英国人の先生の指導で英語劇を作り、英語だけでコミュニケーションができたことがとても嬉しくて、将来は外国と関わる仕事ができればいいなと思っていました。

私は外国語の音が好きなんです。英語もそうですし、中国語の発音にも、ものすごく凝って、方言にも取り組みました。香港に住んでいた時は広東語を勉強し、台湾では台湾の言葉を勉強し、勉強というより趣味ですね(笑)。

ただ私は、今でこそ東京大学で、英語で授業をしていますが、英語が好きだったと言っても、田舎育ちで、外国の大学で学位を取った人や帰国子女の人たちとは比べ物になりません。86年にアメリカに半年留学したあとは、13年間英語圏に行くこともなく、中国語が上達した分、英語は不安がありました。それでも2000年以降、前の職場(防衛研究所)で、海外からのお客さんに英語でブリーフィングする機会がたくさんありました。始めは逃げていたのですが、これはチャンスかもしれないと思うようになり、そんな経験を重ねるうちに、徐々に英語でのコミュニケーション能力が向上していきました。最初はどれだけ知ったかぶりで通してきたかわかりませんよ(笑)。それでも続けていけば、できるようになります。人は必ず習熟する、成長するというのが私の信念です。

海外の方と交流していく時のコツはありますか

私は日本のことを積極的にしゃべります。日本は基本的に誤解されているか全然知られていないかのどちらかで、日本研究の専門家でも相当ひどい間違いをしています。話題は、日本の首相はどうして頻繁に代わるのかといった基礎的なところから、最近の政治状況、防衛大綱のことまで。東アジアの新聞は、日本の軍事や安全保障にかかわることについて、現実と随分かけ離れたおどろおどろしいことを書くので、どう読めば本当のことが分かるのかといった説明をします。向こうにしてみれば松田と会えば何か新しいことが聞けるということになり、日本に来る時には必ず会いたいと言ってくるようになります。そうすれば私も聞きたいことを聞けますし、それが長くお付き合いする秘訣でもあると思います。

先生のエネルギーの源はどこにあるのでしょうか

私、「研究者は、から元気」というスローガンを持っています(笑)。できなくてもできる、書けなくても書けるんだと言って元気にしているのがいいですね。よく、気分転換に何をしますかと聞かれ、違う仕事をすると答えます。ある原稿で詰まったら他の原稿を書く。それで随分リフレッシュしますよ。私は常に複数の原稿を同時に書いています。同じ本で言えば、違うチャプターに同時に手をつける。すると、どれだけのぐらい時間がかかるか分かります。そして、すぐに終わりそうなものから片付けていくんです。

博論を書く若い人によく言うんです。何章からでもいいから毎日とにかくやりなさいと。第1章から書かなくていいんです。書きやすいところからやればいい。書けない時はピブリオ書いたり、表を作ったり、資料整理だっていい。それをやっていくうちにちょっと文章が進んだりします。博論なんて言うのは一章ごとのトンネルを掘っていくようなもので、どこかで岩盤に当たって止まる。そうしたら他のトンネルを掘ればいい。他をやっていくうちに岩盤の削り方が分かってきて、最初に止まっていたところも書けるようになる。順番に書く必要はありません。

尖閣の問題で日中関係を心配しました…

日本人からすると、中国はなんであんなに恐ろしい国なんだろうと思われるでしょうが、それは政治体制の違いなんです。一般の人々は共産党政権に偏った情報を信じさせられ、その上で行動しています。デモも人為的です。2012年夏、中国はちょうど権力闘争の真っ最中で、日本に対して弱腰に出るわけにいかなかった。それで、日本をたたくと決めました。決めたからには、ありとあらゆる論理を動員して徹底的に日本を批判しました。でも、改善する時には逆になります。まず改善すると決める。今度はその瞬間から、今まで言ってきた理屈は全部放って、改善するための論理を動員してきます。その時に日本人は、お前、去年あんなひどいこと言ったじゃないかとやっちはいけません。中国が改善モードに入ったと思ったら、それに合わせていく。常に鷹揚に構え、クールヘッドでいるべきです。中国は、もちろん反日的な部分はありますが、日本を高く評価し、日本に行きたいと思っている人も大勢いる国です。それに、日本とけんかするとアメリカを呼び込むことになり、中国にとっては不利です。ですから、日本は中国からもっと憧れられるような国になって、けんかすると損で、仲良くした方が得だという状態を強化していけば、うまくいくチャンスがでてくると思います。

学環学府 38 2.2013

東京大学大学院 情報学環・学際情報学府
〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1

Interfaculty Initiative in Information Studies
Graduate School of Interdisciplinary Information Studies,
The University of Tokyo

編集委員：厩本純一・前波奈保子・浜田忠久

mail : news@iii.u-tokyo.ac.jp
<http://www.iii.u-tokyo.ac.jp/>

あとがき

ニュースレターの編集に加わるようになって7年。この間にインタビューをお願いした先生は20人になりました。温かく迎えてくださり、取っておきのお話を聞かせてくださった先生方にこの場を借りてお礼を申し上げます。インタビューは1時間ほどお時間をいただきますが、これを2千字の原稿にしなければなりません。あのお話も載せたい、このエピソードも紹介したいという気持ちを抑えて、削りに削ります。この2千字の中で、お話しくださった先生の魅力を一片でもいいから伝えたい、というのが願いであり目標です。1ページの短いインタビュー記事の後ろに、紹介しきれなかったお話が山のようにあるのだろうと想像を膨らませながら読んでいただけると幸いです。(前波)

